

研 究 分 野	資源管理	部 名	資源管理部
研 究 課 題 名	多元的資源管理型漁業推進事業 日本海海域		
予 算 区 分	漁業調整費 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.15 ~ H.17		
担 当	伊藤 欣吾		
協 力 ・ 分 担 関 係	水産振興課		

〈目的〉

本県日本海海域でこれまでに資源管理を実施してきたヒラメ、マコガレイ、マガレイ、ムシガレイ、タイ（マダイとチダイ）、ハタハタの資源管理後の漁獲動向を把握する。

〈試験研究方法〉

漁獲量と漁獲金額の解析には、「青森県海面漁業に関する調査結果書」（県統計）と各漁協の集計表を用いた。なお、各漁協の集計表は日本海沿岸 9 漁業協同組合（小泊、下前、十三、鱒ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱸作、岩崎村）を対象とし、1993年1月～2004年12月の期間である。十三漁協は2002年1月より鱒ヶ沢漁協への水揚げから独立し、脇元漁協は小泊漁協へ、車力漁協と赤石水産漁協は鱒ヶ沢漁協へ水揚げしている。これら 9 漁協の漁獲量は大間越漁協を除いて日本海全漁協を網羅している。魚体測定は、様々なカレイ類が混在する大戸瀬漁協の銘柄「小カレイ」の魚種組成を明らかにするため1～5月に実施し、ムシガレイについては4月の大戸瀬漁協を、ハタハタについては鱒ヶ沢漁協沖合底びき網と岩崎村漁協定置網を対象に実施した。漁獲物の全長組成を推定するため、これらの魚体測定データと、マガレイについては資源評価事業委託調査で実施した魚体測定データを用いて、ヒラメについては小田切（1987）の銘柄別全長組成などのデータを用いて解析した。

〈結果の概要・要約〉

最近の漁獲動向は、ハタハタが急増、ムシガレイが微増、ヒラメ、マコガレイ、マガレイ、タイは多少の年変動があるものの横ばい傾向となっている（図1）。ただし、2003年は鱒ヶ沢漁協の沖合底びき網船が1隻減船となり、また、2003年10～12月に大型クラゲが大量出現して満足な操業ができなかったため、単純に漁獲量の比較で資源状態を見るのは注意が必要である。漁獲金額（図2）は漁獲変動とほぼ同様に推移しているものの、単価（図3）の低下が激しく、漁獲量ほどの伸びは見られなかった。

漁獲物の全長組成と年齢組成については次のとおりである。ヒラメについては、全長組成を小田切（1987）の銘柄別全長組成データなどを用いて推定したが、全長別雌雄比に年変化がないとは考えにくいことから、毎年魚体測定を実施し、銘柄別全長別雌雄比を算出する事が推定精度を高めるために必要であると思われた。また、年齢組成については、小田切（1987）のプログラムを使用した。プログラムに不具合があり、結果を出すことができなかった。マコガレイについては測定データが不足のため全長組成の推定は困難であった。マガレイについては2003年度から開始した資源評価事業による魚体測定データから推定すると、雌雄ともに2歳～3歳が主体に漁獲されていた。ムシガレイについては毎年盛漁期の4月に魚体測定したが、2004年の体長は雄では $160 \leq \sim < 250 \text{mm}$ 、雌では $210 \leq \sim < 300 \text{mm}$ が主体で、各年とも雄の方が多く漁獲されていた。ハタハタについては、年齢組成を見る限り、現在の資源は2001年生まれの卓越年級群に支えられていると思われた。

〈主要成果の具体的なデータ〉

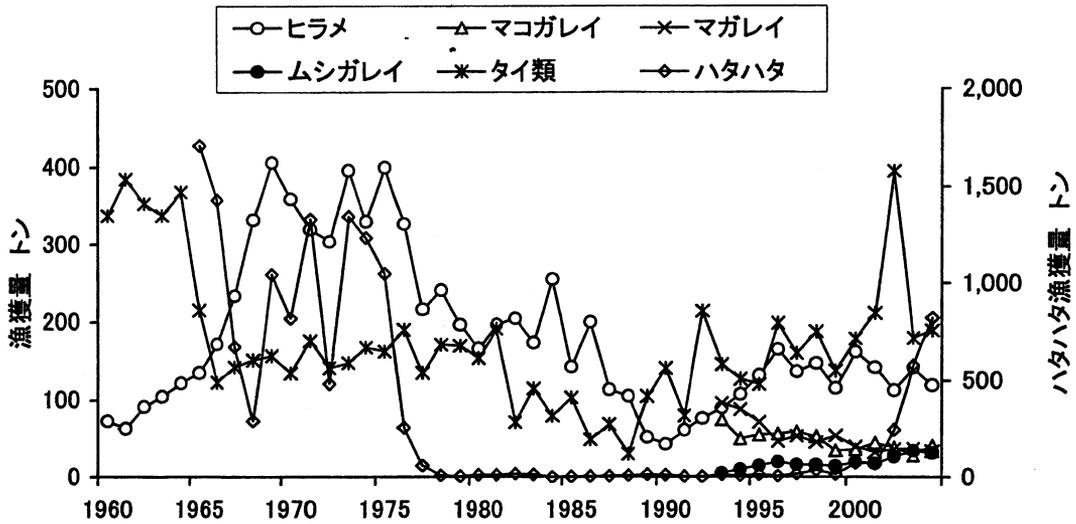


図1 漁獲量の経年変化 (資料：県統計、1993以降水総研調べ)

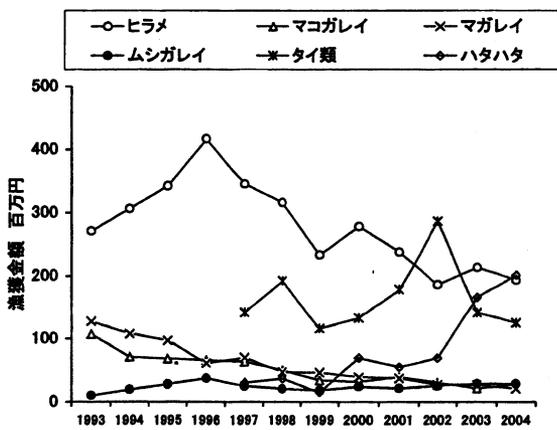


図2 漁獲金額の経年変化 (水総研調べ)

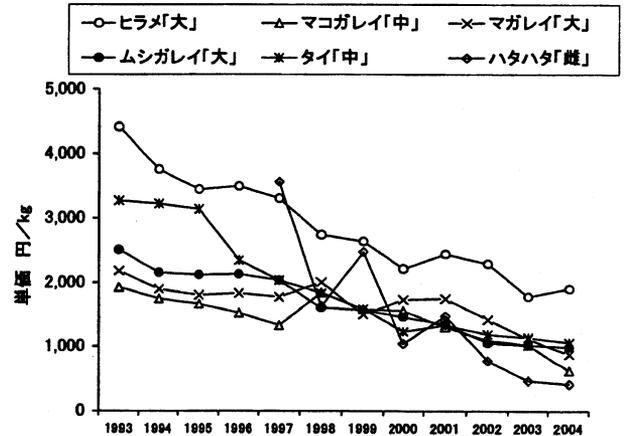


図3 単価の経年変化 (水総研調べ)

〈今後の問題点〉

資源解析をする上で、測定データが不足している。

〈次年度の具体的な計画〉

本事業は今年度で終了。ヒラメ、マガレイ、ハタハタは資源評価事業でモニタリングされる。

〈結果の発表・活用状況等〉

青森県 (2005) 平成16年度多元的資源管理型漁業推進事業報告書。(印刷中)